

書評

『フィールドワークへの挑戦——〈実践〉人類学入門』

●菅原和孝 編

(世界思想社、2006年、四六判、323頁、2,415円)

『アクション別フィールドワーク入門』

●武田丈・亀井伸孝 編

(世界思想社、2008年、四六判、270頁、1,995円)

●石岡 丈 昇

(北海道大学大学院教育学研究院助教)



「フィールドワークの方法論」を論じた著作はすでに数多い。だが、具体的対象から方法を切断し、その方法のみを一般化して語る態度に、常に私は違和感を抱いてきた。そうして明示された方法論のマニュアルに沿って調査をおこなえば、ある一定の水準の質的調査ができるという議論前提がそこでは自明視されているからである。

ここに取り上げる2冊は、こうした方法論の一般化とは逆行する方向性へとフィールドワークの営みを再定位しようとするものだ。すなわち、調査者と対象との固有の関係を凝視し、その個性にどこまでも根ざした世界認識を立ち上げようとする試みである。平たく言えばこうだ。その調査へと衝き動かされている者にしか問えない、書けないことは何か。そもそもなぜそれを問おうとしているのか。アフリカやアジアといった遠地へ赴こうとも、この国の内部の見知らぬ世界を訪れようとも、最終的に立ち返る地点は、この2冊に収められたいずれの論考においても、この点にある。

『フィールドワークへの挑戦——〈実践〉人類学入門』は、京都大学の全学共通科目「社会人類学演習」で提出された学生レポートをもとに、フィールドワークに体当たりで挑んだ学生たちの知的格闘の痕跡を再構成したものである。第Ⅰ部では、これまでアフリカ原野を歩き回りサルを見るような構えで人を見てきた編者が、学生レポートを「仕事の世界」「社会とその周辺」「コミュニケーションの内と外」「信じることの手ざわり」「『外国人／異文化』との遭遇」という5つの主題別に分類整理したうえで論評を加えている。ここで特筆すべきは、学生レポートに対する編者による容赦ない批判の数々である。「何よりの問題は『根源的な』問いかけが欠落していることだ」(74頁)、『『異国へ行く』ことは人類学的な想像力にとって本質的な契機ではない」(145頁)。編者は

フィールドワークが『『生のかたち』への絶えない問いかけへと内在化される」(3頁)際に初めて意味をもつと言う。編者は決して私語りの人類学を目指しているのではない。私を問うことが社会を問うことへとつながっているような、そうした地平へと学生、さらには読者を誘おうとする。第Ⅱ部では特に質の高いレポート5本が編集のうえ掲載されているが、その第4章で摂食障害を扱った高田彩子の論考は、「生のかたち」への問いかけが内在化されるとはどういうことかを事実に描いた作品である。

『アクション別フィールドワーク入門』は、フィールドワーカーが繰り出すさまざまなアクション、すなわち狭い意味での調査(情報収集)に収まりきらない行動の数々を報告したものである。そのねらいは、「論文になるとときにはほとんど割愛されてしまうこうしたアクションのなかにこそ、フィールドに関わる者の現実の姿がある」(1頁)点にある。興味深いのは、論者によって大きく異なるフィールドワークの構えが読者へと伝わってくる点である。論考の中身で言えば、この本の編者の一人である亀井伸孝による「異文化理解の姿勢を教室で教える——ろう者の文化を学ぶワークショップ」が抜群に面白い。

フィールドワークは「どこか向こう」のことを調べる営みを通じて「いまここ」の認識へと立ち返る試みであることを、ここで取り上げた2冊の本は教えてくれる。「いまここ」から切り離された「どこか向こう」の世界を凝固させた「専門的」方法で解析するといった社会調査が量産されつつある現在、ここで取り上げた2冊こそが社会調査論のテキストにはふさわしいと思う。

『ぼくにだってできるさ ——アメリカ低収入地区の社会不平等の再生産』

● J. マクラウド 著

(南保輔訳, 北大路書房, 2007年, A5判, 291頁, 2,940円)

● 山 北 輝 裕

(関西学院大学大学院社会学研究員)



「おれは仕事を見つけなきゃ、どんな仕事でもいい。ただの仕事さ。で、ちゃんとした金を稼ぐんだ。もし週に 100 ドル稼げれば、オレははたらくぜ。このプロジェクトからお袋を連れ出したい、それだけさ。でも、学校じゃメチャクチャやってるし。簡単にはいかないさ、ジェイ。毎晩、そこ(13 番出入口)で 1 時までぶらついてる。学校に行きたいって思ったことはないさ。ぶらついてハイになっていたいさ。でもオレはまぬけてわけじゃないぜ。もし今日 30 ドルくれたら、明日は 100 ドルにして返してやるよ。わかんねえ。穴の中にいて出られねえみたいだ。出られるかもしれねえけど、むちゃくちゃたいへんなんだ。おわってんだよ。」

アメリカ人の間でも、眉をひそめる悪名高いクラレンドハイツという「貧困地区」。ここに、2 つの若者仲間集団。白人を中心にしたホールウェイ・ハンガーズ、そして黒人を中心にしたブラザーズ。本書は、これら 2 つの若者集団のアスピレーション(自身の希望や能力、機会構造の特徴の評価)が、現代アメリカにおいて、どのような様相をみせるのかを参与観察によって明らかにした力作である。本書は、原著第二版の翻訳だが、1987 年初版は驚くべきことに、著者の卒業論文である。第二版には、初調査の 83 年から 8 年後の 91 年追跡調査が含まれている。この追跡調査も、再生産論を語るうえできわめて重要な位置をしめている。

さて、登場人物であるハンガーズは、四六時中、13 番出入口でたむろし、酒を飲み、ドラッグをきめこむ。いっぽう、ブラザーズは、アメリカの業績主義的イデオロギーを信奉し、真摯に登校する。ハンガーズはブラザーズに対して人種差別的発言を繰り返し、ブラザーズは昼間から泥酔するハンガーズを嫌悪する。

彼らをまちうける将来は明るいものではない。ハンガーズは、さほど安定した職にありつけない。努力していたブラザーズでさえも同じように、マクドナルドなどで、低賃金を得て生活をしている。冒頭の語りはハンガーズの若者のものであるが(これ自体が現代の白人の貧困を象徴している)、彼らの平準化されるアスピレーションの社会構造的な要因を、学校・家族・仕事といった領域の質的調査から本書は強烈に活写している。

著者はこの土地へ調査目的で入ったのではなかった。当初、健全若者育成プログラムのワーカーとして入り込んだのだ。その経験のなかで、若者のアスピレーションに関心をもち、卒業論文のテーマとする。しかし、参与観察はけっして平坦なものではなかった。若者たちのバスケットボールに参加することで急速に、彼らと距離を縮めていく著者であったが、ある日、ハンガーズとブラザーズが闘うことになった試合で、逡巡する彼は、いったいどちらのチームに入ったのか? また、ブラザーズに対するハンガーズの人種差別的な発言を前に、白人である彼がとった行動とは? あるいは、ハンガーズが、13 番出入口でドラッグをきめこんだとき、ワーカーとしての(あるいは調査者としての)彼のとる行動とは? またその現場を、彼らの母親に見られたときの彼の思いは? 深い参与観察を経験した者であれば、読みながら思わず固唾をのむ場面ばかりである(調査法に関する議論は付録に収録)。

彼の行動は、調査者として失格かもしれない(ワーカーとしても危うい)。しかしこの「率直な間隙」こそが、参与観察の引き受けるべき本質だと再確認したのは評者だけだろうか。賛否はあれ、参与観察の方法論をめぐる重要著作であることに間違いはない。

書評

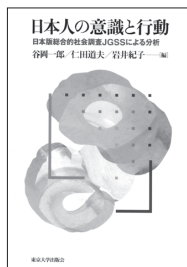
『日本人の意識と行動』 ——日本版総合的社会調査 JGSS による分析』

● 谷岡一郎・仁田道夫・岩井紀子 編

(東京大学出版会, 2008年, A5判, 504頁, 7,560円)

● 菅 野 剛

(日本大学文理学部社会学科准教授)



量的社会調査に携わる者であれば、誰もが何らかの形で GSS や JGSS という名を耳にする。本書は、日本版総合的社会調査 JGSS: Japanese General Social Survey のデータを用いた計量研究の書籍である。多様な調査項目を駆使し、広範囲に渡るテーマを取り上げている。計量研究の裾野の広さと可能性を具体的に指し示すという点で、本書は十二分に貴重である。さまざまな専門分野の研究者が力を合わせた本書からは、研究の背景と視点についても幅広い示唆が得られる。後半の方法論的な研究についてもたいへんに興味深い。

本書では、家族、労働、教育、政治、規範、ライフスタイルといった、社会科学諸分野のさまざまなテーマを網羅することに工夫した様子が伺える。部の構成は、JGSS の背景や日本人の意識と行動の変化を全般的に扱った「序」から始まり、「I 結婚と家族」「II 働くことの意味」「III 教育と階層」「IV 政治意識と政治参加の現在」「V 社会規範と逸脱行動」「VI ライフスタイル」「VII JGSS の調査方法」となっている。それぞれの部に関連論文が複数収録されており、一般読者にもアピールするテーマを、研究の視点からも意義深く分析するという難易度の高い試みが果敢になされていると言える。

各論文に対する学術的評価はそれぞれの学問領域で専門的になされるべきものであるが、一方で、このようなスタイルで研究成果を広く世に問うこと自体にも社会的意義が存在する。さらに、JGSS はオープンなデータである。データとこの書籍を手にするのは、(実際には分析の再現はそれほど単純なものではないにしても) 執筆者とのいわばダイアログとなる。研究や分析手法の習得を志す者にとっても最適と言える。

内容に合わせて、論文の分量は 8~18 ページ程度となっている。これだけ多岐に渡る内容がコン

パクトに収録されているため、当然ながら読者側にも高いレベルの知的柔軟性が要求される。読者によっては、馴染みのないテーマについて説明や展開がやや駆け足に感じられる場合もあるかも知れないが、これ以上を望むのは酷というべきである。ホームページでは、調査票や基礎集計が公開されており、論文で詳細が触れられていない調査項目についても確認がきちんと出来る。

本書に関連して、JGSS を用いて広範な領域を記述的に分析した岩井・佐藤編 (2002) と、JGSS を用いてデータ分析の基礎を丁寧に解説する岩井・保田 (2007) がすでに存在する。私自身は、学生を社会調査の世界へ誘う道しるべとして、あるいは分析への理解を深めるツールとしてこれら 2 冊をたいへんに重宝している。さらに本書を含め、これら一連のシリーズは研究にも教育にもたいへん重宝な書籍であり、社会調査データ、データアーカイブ等の大規模なインフラストラクチャーを、私たち個々人と結びつけるソフトウェアとしての役割を果たしている。国内外のさまざまな社会調査の良いところに基づく一連のプロジェクトの背後には膨大な尽力があるものと推察し上げるが、一方で、次はどのような新しい展開になるのか、今後もさらなる期待を抱いてしまうものである。

文献

岩井紀子・佐藤博樹編, 2002, 『日本人の姿——JGSS にみる意識と行動』有斐閣。

岩井紀子・保田時男, 2007, 『調査データ分析の基礎——JGSS データとオンライン集計の活用』有斐閣。